

# 外国出張報告



「感染症研究部 感染病理研究室長（併任；プリオン病研究センター） 播谷 亮  
主任研究官 木村 久美子

目的・用務：第6回海綿状脳症診断国際ワークショップ

出張期間：平成14年11月23日～12月1日

出張場所：英国獣医学研究所 ウェイブリッジ（英国サリー州アドレストン）

## 〔用務の内容〕

本ワークショップは、英国獣医学研究所で概ね隔年開催され、今回で6回目を数える。その趣旨は、海綿状脳症、特に牛海綿状脳症(BSE)の診断方法や最新情報を、英国から世界の家畜衛生関係者に提供するというものである。集会は少人数制で、今回の出席者は28人。アジアからの参加は我々を含め3名、他は欧州および北米からの参加者であった。これに対して講師陣は41名、その中にはBSEを最初に報告したGerald Wells、BSEの伝播が主として肉骨粉によることを最初に提唱したJohn Wilesmith、行政にあってBSEの撲滅を指揮したDanny Matthews、プリオン説の提唱者でノーベル賞受賞者であるStanley Prusinerらが含まれていた。今回の集会の特徴は、迅速診断法とその評価に関する講演が多かったことである。参考のため内容をその講演順に列挙する。

- 1) BSEのコントロール：政治、経済およびリスク・バランス (Danny Matthews)
- 2) 検査の安全性の確保 (David Redwood)
- 3) 汚染除去 (David Taylor)
- 4) BSEの臨床症状 (Timm Konold)
- 5) スクレイピー感染羊とBSE感染羊の臨床症状 (Christine Berthelin-Baker)
- 6) 確定検査の概要 (Marion Simmons)
- 7) 免疫組織化学的診断とその解釈 (Yvonne Spencer)
- 8) 迅速診断法：EUの評価方法 (Kath Webster)
- 9) 現行の迅速診断法、ENFERテスト (Abbotts)、Plateliaテスト (Bio-Rad) およびPrionics-check (Roche) の概要 (各メーカー担当者)
- 10) 迅速診断法の評価方法 (Kath Webster)
- 11) 自己融解したサンプルに対する、EU承認済みの3つの迅速診断法の有効性の比較 (Angus Wear)
- 12) 脳の採材法に関する実習：大孔法と開頭法 (Neuropathology unit)
- 13) 病理標本の顕微鏡観察実習 (Gerald Wells & Marion Simmons)
- 14) 新しい迅速診断法、CDI (InPro Biotechnology)、LIA (Roche)、CediBlot (Cedi Diagnostics) およびDELFI (Perkin Elmer Life Science) の概要 (各メーカー担当者)
- 15) 迅速診断法：その未来 (Roy Jackman)
- 16) 迅速診断法のデモンストレーション (各メーカー担当者)

- 17) BSEの疫学 (John Wilesmith)
- 18) BSE罹患牛の観察 (Timm Konold)
- 19) 組織病理検査室の見学 (Histopathology unit)
- 20) プリオン病の種々の表現形とその診断 (Gerald Wells)
- 21) ウェスタン・ブロット法 (Mick Stack)
- 22) 羊の海綿状脳症における細胞病理と免疫染色態様の多様性 (Martin Jeffrey)
- 23) 生物学的なストレイン・タイピング (Steve Ryder)
- 24) プリオンの生物学を概観する (Stanley Prusiner)

## 〔所感〕

### 1) 研究集会参加の意義

本研究集会の内容は上述のごとく充実したものであり、知識を再確認すると同時に知見を広げることができた。問題点は参加費が高い(£2,000 = 40万円弱)ことではあるが、動衛研職員だけでなく、上記の内容に興味を持たれた家畜衛生関係諸氏には、次回ワークショップへの参加をぜひ検討していただきたい。

また、我々にとってもうひとつ重要であったことは、英国の人々と旧交を温められたこと、さらに英国以外の人々と知り合えたことであった。これにより研究材料の提供を依頼できたことは、我々にとってきわめて意義深い。

### 2) 英国獣医学研究所と動衛研のBSE研究体制の比較

英国獣医学研究所訪問は今回で4回目であったが、その都度、BSEの研究診断体制が拡充されていることに驚かされる。例えば我々の専門である病理部門の体制をみると、1991年には神経病理研究室の人員は7名であったが、1997年には20名弱となり、それが今回訪英時には30数名となっていた。このうち研究員は4名、他は研究支援部門の職員であった。BSEの発生頭数の差に起因する仕事量の多寡を考え合わせると、我が動衛研の体制は必ずしも不十分とは言えない。しかしながら、下記の2点について深く認識しておく必要がある。1点目は、すでに指摘されていることではあるが、研究テーマを厳選する必要があること。2点目は、その人数において英国と大きな隔たりがある研究支援部門の強化を可能な限り図ることである。

### 3) 最後に

今回の出張にご尽力いただいた動衛研関係諸氏、英国にて多々お世話いただいたGerald Wells、Marion Simmons 両氏を初めとする獣医学研究所諸氏に深謝する。



# 外国出張報告

九州支所 臨床病理研究室長 佐藤 真澄

目的・用務：第53回アメリカ獣医病理学会出席及び共同研究打合せ

出張期間：平成14年12月6日～12月16日

出張場所：アメリカ ニューオーリンズ及びオハイオ州立大学

## [用務の内容]

The American College of Veterinary Pathologists は日本の獣医病理学会に相当する学会で、例年冬に定期総会が開催されている。2002年12月7～11日にルイジアナ州ニューオーリンズのフェアモントホテルで開催された第53回本学会総会に出席した。参加者は約1000名で、日本からは獣医科大学病理学教室の教職員を中心に約20名が参加していた。学会は口頭発表及びポスター発表でその内容はそれぞれ、Clinical Pathology、Natural Disease、Experimental Disease、Toxicological Pathologyなどに分類されており合計約140題について討議された。私はPathological Characteristics of the calves cloned from somatic cells. (体細胞クローン牛の病理学的特徴)というタイトルでポスター発表を行なった。一般演題に加え、いくつかのトピックに関して Concurrent Sessionとして細胞内寄生病原体、アポトーシス、遺伝子治療、繁殖病理などについて招待講演者によるシンポジウムなども行われた。

学会の帰りに、今回の学会のProgram Chairを務められたオハイオ州立大学のDr. Thomas J. Rosol (Professor, Department of Veterinary Biosciences 兼 Senior Associate Vice President, Office of Research) の研究室を、クローン牛内分泌器官の病理に関する共同研究打合せのために訪ねた。同大学では同博士との研究打合せに加え、博士課程学生のゼミへの参加、Dept. Vet. Biosciencesの数人の教授とのディスカッション、種々研究室や病院施設見学などの機会を得た。

## [所感]

出席したアメリカ獣医病理学会定期総会の内容自体は日本の獣医病理学会と同様で、多くの症例や実験例に関する病理学的知見やシンポジウムなどを興味深く勉強するこ

とができた。口演は毎朝8時から夕方6時頃まで行なわれ、その後7時から9時までは当日事前に公開されていた標本に関するスライド標本検討会が毎晩行なわれるなど、かなりハードな日程であった。ポスターも初日の朝7時までに掲示するように、という指示であった。アメリカやその他の国々からの研究者に加え、日本から参加していた研究者とも種々のディスカッションをすることができた。

訪問したオハイオ州立大学獣医学科のキャンパスは州都コロンバスに位置していた。広いキャンパス内に点在するDept. Vet. Biosciences やオハイオ州ならではの馬専門病院の見学等を行なった。馬病院には数多くの入院ラマもみられた。ラマが多いのもまたオハイオの特徴とのことであった。レジデント学生に対する病理実習は印象的であった。まず解剖を行なう数症例について全体でカンファレンスを行ない、その後数人ずつのグループに分かれて解剖を行なっていた。その際、AFIP (Armed Forces Institute of Pathology、アメリカ陸軍病理学研究所) 退役者などが各グループに1人ずつついて指導をしながら解剖を行ない、終了後は再び全員で症例についての討論を行なうという形がとられていた。病理のようにある程度経験が重視される分野ではそのようなリタイアした人々が教育現場で活躍することも大変意味のあることだと感銘を受けた。

ジャズの町として名高いニューオーリンズはアメリカの中でも特異な街なのだそうだ。夜はちょうど歌舞伎町に似た感じで、年に一度の祭の時期には人々は「もっとクレイジーになる(Dr. Rosol 談)」とのことであった。

内陸部に位置するコロンバスは非常に典型的なアメリカの地方都市であった。同大学ビジネススクールのOBが寄付したという、同年開業したばかりのホテルに滞在したが、窓からの景色はつくばセンターにそっくりな整然とした街並であった。